

鴨居羊子

午後の踊り子



角川書店

午後の踊り子

鴨居羊子



午後の踊り子



1980年5月31日 初版発行

著 者 鴨 居 羊 子

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話03(265)7111(大代表) 〒102

振替東京3-195208

東洋印刷・鈴木製本

Printed in Japan

0095-883089-0946(0)

午後の踊り子

目次

オーレ・フラメンコ ————— 7

黄金の脚と銀の指 ————— 20

ひたすらな美しい顔 ————— 33

こげついたパーエージャ ————— 45

舞姫カルミーナとパキータ ————— 58

六度三分の踊り ————— 71

おんな二人の旅 ————— 85

光の島、クレタ島 ————— 98

ファビアンヌの絵日傘 えひかさ ————— 111



不在証明の女 123

深夜の救急車 136

仮縫室 153

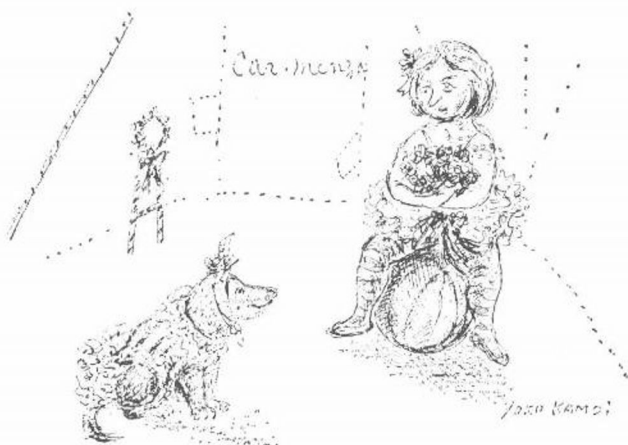
ピエトラ・サンタのクリスマス 166

マリアとマルタ 188

フラメンコの日々 200

砂丘に消えた絵巻 220

あとがき 234



装画・さし絵 鴨居 羊子

装丁 門田ヒロ嗣

午後の踊り子

オーレ・フラメンコ

土曜日のお勤めは二時半まで。次が日曜日だと思ふと午後の陽ざしまで、ゆったりと長目にのびて、普通の日とは時間の内容も異なつた様相を呈してくる。

私は二時半のブザーが鳴るやいなや、バッグともう一つ、レッスン着をつめこんだ大袋をひっさげて、オフィスを大あわてでとびだし斜めに走り出す。つまり斜め二筋向こうにフラメンコの練習場がある。

オフィスをとびだしたとたんには私は下着会社の社長ではなく、カミシモを脱いでアップパを着た女の子になる。私は踊り子だ。まるで女学生のように身が軽く、その前途がどうなるやも判らぬ危なげな斜めのよろよろ歩きで、胸をふくらませてとんでゆく。

昔もこんな気持ちのときがたくさんあったような気がする。するとあんまり変わって

ないのかな。そんなことはどちらでもいい。私はひどく忙し気に歩く。一分たりとも遅れると、師匠は容赦なくレッスンを始めてしまうし、五分遅れれば二つほどの足さばきは終わってしまう。

角のコーヒー屋を曲がると、洗濯^{せんたくや}屋がある。この洗濯屋は外国で見かけるような間口の広いしゃれた構えで、ガラス越しに一家じゅうがそれぞれの分担の仕事に精出しているのがよく見える。出口に年とったポメラニアンとかいうちっぽけな犬が番犬よろしく座っている。

あまりの夏の暑さで、ある日、ポメラニアンはバリカンで全部毛を刈られてしまったので、白いお腹と卵色の縮れた産毛におおわれ、まるで、つるっぽげのパンビの子供のようになった。別の小犬だと思ってしゃがんで撫^なでると、いつもはしゃがれたヒステリー声で吠^はえていたくせに、威張った長髪の威力がないため、すっかりおとなしくなつてきた。だいたい純血種の動物のスタイルというのは、国連会議のようなもので決まっているのだろうか。耳が大きく、シッポの長いボクサーだって面白いと思うのに、そうしてはいけない法律でもあるのかしら。



私はまた斜めに歩く。五分もしたら練習場へ着くのだが、この道行きは、よくよく考えると、私の人生の中のハスカイの部の入口みたいなものだ。どっちかというとは私はハスカイが好きだ。人生全部ハスカイだったかまやしない。

しかし今日は他の生徒もいるので、あたふたと走っているが、自分で決めて、一人の練習をしようと思うと、歩いている間でさえ、今日はやめどころか、どうしようか。何のためバタバタやってんだろう。少しも上達していないや、……と無理にやめさせようという理由づけを片一方でやり、急に廻れ右をして帰ってきて、そして一日イライラしていると
きがある。

この前、人から「なぜフラメンコをしているのですか？」と聞かれたとき「ビールがおいしいからです」なんて変なことしちゃった。

フラメンコを習って、もう十年あまりになる。「とにかく、毎日一時間は原則として練習を課しています。私は練習場の花です。練習することに意義があるんです」などと他人によく聞いていたが、十年間、毎日やってたわけではなく、毎日やらねばならぬ、ねばならぬという意識がそういわせてしまう。自分のサボリをカムフラージュしてウソをついて

いるような気がする。ウソをついてる間に、ほんとに毎日必死でやってるように思いこんでしまい、その割に何と下手なんだろうとがっかりする。体を動かすというのはそれほどめんどうなものだ。

師匠はスペインでの修業を終えて帰ったばかりの中川マリさん。この大きなビルの中の小さな部屋を棲家として獲得し、屋上にはバレエ教室や空手教室があって、私達も悦に入って街を見おろしながら練習をしていた。

ところが、バタバタ踏み鳴らす足音がうるさいため、下の階の住民から署名入りの文句状がきて、地下の駐車場の一隅いちぐうの、もと物置小屋みたいなところへ格下げとなった。

暗い駐車場の中のこの部屋は、外から見ると劇場などで舞台の上手かみてに簡単に造られる小さい家とよく似ている。すぐにでも黒子がきてばらすことだってできそうな即席小屋だ。広さはベニヤ板十二枚分で、四人並べばもう一ぱいだ。

先生はダンダラ縞じまの手編みの毛糸タイツで足ならしをしている。足の裏から鈴みたいにくるくると音がころがり出てくる。私はよく人のいないとき師匠の靴くつをそっとはいて足ならしをしてみる。あの靴の裏に仕掛けがあるように思えてならない。

私は大袋から、そそくさと練習衣をひっぱり出す。初めにタイツをはき、その上に宇宙服のようなビニール製ズボンをはき、そのまた上に茶色の毛のタイツをはく。そして黒シヤツを着て、さらに木綿の赤いスカートを着用する。まるで歌舞伎の馬の脚のようになくこうになる。

この赤いスカートは、昔ジプシーの踊り手がお別れのかたみにくれたものだ。下段だけ二重のフリルになっている。何べんも洗いざらした木綿には、フラメンコ練習の汗の伝統がしみついている。私は誰が何といってもこのスカートは大切にし、誰にも貸してやらない。

私は踊りのレッスンのときは、まず練習衣に憧れと誇りをもっているのだが、思いきり汗をかいて余分の脂肪をはらいのけようとすれば、かっこうなんてかまっていられない。汗は流れて腰から脚を伝わり足の先までいって、靴がピチャピチャぬれて、靴はムラムラに汗のしみがつくから、いつもズズ汚れの中古を使用する。

こうしてややこしい着がえを終えると正面の鏡に向かう。いつもながらすっきりした形とはいえない。下半身が重くてハンディもある。うまく踊れたにしても鏡を見ると変な踊

りに見える。しかし、とにかく今は仕方がないのだ。

私のクラスは上級生で三人いる。今まで個人レッスンしか受けたことがないが今度マリーさんがスペインから帰ってきて教室をやりだしてから、仲間の弟子があちこちから集まったので、このごろは数人と踊る。

不思議なことに少しでも脚に覚えがあるとそれぞれに自意識が強く働き、ちょうどサムライか西部の渡り者みたいに、めいめいが自分の得意の足ならしをやる。威嚇^{いかく}作業だ。あちこちから集まってきた同志もいわば、どこかの練習場にいたつわもので、そこがあきたらずにやってきた一匹狼^{おおかみ}だから、傲慢のサパテアート（足さばき）をもっている。相手のサパテアートを聞いて、おヌシやるな！ てな具合なのである。何となく西部劇の鉄砲撃ちに似た趣がある。

だから「まあ、こんにちは。ごきげんよう」なんて挨拶^{あいさつ}はさらさらしない。そこにいるのだからコンニチハはいらない。敵意はないがなるべくサヨナラぐらいにとどめて散ってゆく。

さてマリーさんが先頭で、後ろに四人並んで三十分の足さばきが始まる。これは何十種

もある脚の基本を、思いきり床をけり、たたく。この流れの中に身を投じるとは、もうわめいても騒いでも最後まで他動的に足を動かしていなければならぬ——という、一種のサディスティックな喜びでもある。

一つの足さばきをこれでもかこれでもかと偏執狂のように繰り返す。体の奥底から汗が噴き出してくるのがわかる。人間ポンプとはこのことだ。

隣りの雪江氏も千代子女史も顔があからみ、無念無想の面持ち。今までよく一人でレッスンしていたときは、アーシンドイ、アーシンドイ、ダメダメダメ、私は太ってるからだ。脚はよいとして心臓がダメだ。第一、ここの床は音が悪い、とあらゆることにケチをつけて、バッテリー床に座りこんで、シンドイシンドイを三十回ぐらいわめいてみる。

昔、スペインへゆく前のもっと無名時代のマリーさんと一緒にレッスンしたときは、わざと手拭てぬぐいとりに行ったり、足がもつれたフリをして止まってみたりして、何べんも一息ついた。昔からこのマリーさんは自分へのレッスンのきびしい人で、しんどいという言葉は禁句であり、水すら飲むのを禁じていた。私はせっかく出した汗の十倍もガボガボと水を飲んだ。